

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19330104  
 研究課題名（和文） 現代の育児環境に関する国際比較研究 日・韓・泰・米・仏・瑞の  
 6 カ国調査の細分析  
 研究課題名（英文） International Comparative Study on Child Rearing- Japan, Korea, Thai,  
 U.S.A, France and Sweden.  
 研究代表者  
 大槻 奈巳（OTSUKI NAMI）  
 聖心女子大学・文学部・准教授  
 研究者番号：30356133

研究成果の概要：「家庭教育に関する国際比較調査」（国立女性教育会館 2005、日本女子社会教育会 1994）のデータを使用し、日本、韓国、タイ、アメリカ、スウェーデン、フランスの 6 カ国について、(1) 社会変動に伴う育児の変容の分析、(2) 家族文化の比較分析 (3) ジェンダー秩序に着目した育児の比較分析を行った。成果は雑誌論文（17 件）、学会発表（13 件）、図書（5 件）、その他（9 件）で発表した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	6,300,000	1,890,000	8,190,000
2008年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
年度			
年度			
年度			
総計	12,100,000	3,630,000	15,730,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会学、家族、育児、国際比較、ジェンダー

## 1. 研究開始当初の背景

本研究のルーツは 10 年前に遡り、1994 年の国際家族年を機に文部省（現・文部科学省）は、財団法人日本女子社会教育会（現・財団法人日本女性学習財団）に委託して「家庭教育に関する国際比較調査」を実施した。当時、世界的に進行する都市化、核家族化、少子化、女性の社会進出などをふまえて、実際に家庭内でどのような子育てが行われているかを国際比較する貴重な大量統計調査として、社

会的な反響を呼んだ。その後、グローバル化と情報化のさらなる進行、雇用流動化などにもともない、育児を取り巻く社会環境は変容し、10 年後の各国の変化をみる再調査の必要性とともに、仕事と家庭の両立問題などの新しいテーマを加えて、国立女性教育会館により国際比較調査プロジェクトが再組織された。この基本的な成果は『平成 16・17 年度家庭教育に関する国際比較調査報告書』（2006 年 3 月）として刊行されている。この

レス発表には前回以上に大きな反響(7つの全国紙に16の記事、37の地方紙に40の記事、ほかにテレビ、ウェブなど多数の報道)があり、特に日本の父親の状況をめぐって多数の質問が研究チームに寄せられた。これらの社会的要請に応えるためには、より詳細なデータ分析とポイントを絞った追加調査、育児環境に関する詳細な国際比較分析が必要であった。

## 2. 研究の目的

「家庭教育に関する国際比較調査」(国立女性教育会館2005、日本女子社会教育会1994)のデータを使用し、日本、韓国、タイ、アメリカ、スウェーデン、フランスの6カ国について、以下の問題群を明らかにする。

- (1) 社会変動に伴う育児の変容；世帯構造、父母の就労状況、子育て支援資源、家庭生活の実態、親子関係、しつけ等の変化を見る。
- (2) 家族文化の比較分析；子どもへの期待、子ども観、育児規範、家族規範などの共通性と異質性を明らかにする。
- (3) ジェンダー秩序に着目した育児の比較分析；ジェンダー規範、育児の夫婦間シェア状況、職業と育児との両立などを分析し、育児のなかに潜むジェンダーを明らかにする。

## 3. 研究の方法

- (1) 国際比較調査データの細分析を行うための定期的研究会の開催
- (2) 日本家族社会学会大会国際セッションの開催
- (3) 全米家族関係学会大会での研究発表
- (4) 海外の研究機関との学術交流および海外の機関へのヒアリング調査の実施
- (5) 「父親と子どもの接触時間」を切り口にした一般書の刊行

## 4. 研究成果

- (1) 成果を研究会のメンバーによって牧野カツコ・渡辺秀樹・船橋恵子・中野洋恵編著、2010『国際比較にみる世界の家族と子

育て』ミネルバ書房を出版した。

(2) 日本家族社会学会大会国際セッションの開催(平成19年9月札幌学院大学)

第一報告「親は子どもに何を期待しているか」大槻奈巳、第二報告「親は何を悩んでいるか」藤本隆史、第三報告「父子の親子時間と父親の子育て参加と態度」酒井計史、第四報告「タイの子育て - 10年間の変化を考える - 」江藤双恵の発表を行った。青木デボラ氏(北星学園大学)、桜井義秀氏(北海道大学)、斐智恵氏(慶應義塾大学)からコメントを得た。総括的討論者の牧野カツコ、渡辺秀樹が、発表と討論者のコメントを踏まえ、国際比較調査の難しさ、本調査プロジェクトの取り組みを述べた。

(3) 全米家族関係学会大会におけるポスターセッションの開催(平成19年11月8日ペンシルバニア州ピッツバーグ、ヒルトンホテル) “International Comparative Study on Fathers Child Care” のタイトルでポスター発表を行った。研究チームから牧野カツコ、渡辺秀樹、船橋恵子、大槻奈巳、の4名が参加した。約60名近くの参観者があった。

(4) 全米家族関係学会大会における発表(平成20年11月6日アーカンソ州リトルロック、ピーボディホテル)

第一報告「日本における最近の家族の変化と子育て - 6ヶ国国際比較調査の概要」牧野カツコ、第二報告「6ヶ国における家族規範の変化」藤本隆史、第三報告「日本の父親の子育て参加に影響する要因」酒井計史報告、第4報告「子育てと仕事のバランス - 日本・スウェーデン・アメリカの父親の意識 - 」船橋恵子を行った。

(5) 海外訪問ヒアリング調査の実施

アメリカ訪問ヒアリングにおける知見

第一に連邦政府は地域の問題や障害を抱える家族、子どもの保護や支援に迫られているが、日本で言えば厚生行政/福祉関係は地

方自治体もっぱら行う仕事である。反対に地方の州政府が一般の親向けの教育に相当する活動をしていることは興味深い。第二に多様化する家族と子どもの変化が著しいが、底辺層への対応とお金のかけ方もすごい。基本的な支援、援助をするという政策理念がよく見える。第三に出産費用、予防注射、検診、疾病等、子どもの出産にかかる費用は、すべて個人と会社が負担する保険によって、カバーされている。第四に保育関係施設は民間ベースで運営されており、施設設備、保育内容、保育士などの配置はかなり多様であった。

韓国訪問ヒアリングにおける知見

子育て支援制度については、従来の低所得層への支援から、普遍的な子育て費用の支援政策に力を入れている。親子関係については、子どもへの期待の高さと、親の自立、子どもの自立が強く結びついている。近年は、経済的後退で、進学や就職において英語の能力が過度に重視される傾向にある。家庭教育については、小学校で親に対して「子どもを育てる親サポートプログラム」などを開発し、両性平等を取り入れた家庭教育プログラムを推進している。

タイ訪問ヒアリングにおける知見

タイでは、2007～2008年に進展した幼児教育の重点化によって、さまざまな幼児教育機関には、「子ども開発」と並行して「(貧困な)子育て中の人の支援」という目的が明確に現れるようになった。しかし、子ども政策においても、家族政策においても「幸福」「道徳」「倫理」「生活の質」などの言葉が多用されており、国民の意識改革によって「子育て・家族の問題」の解決をはかろうという政府の方針はより強まっている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計17件)

牧野カツコ, 2007「『家庭教育に関する国際比較調査』の概要と意義」『国立女性教育会館研究ジャーナル』Vol.11: 3-10. 査読無

牧野カツコ, 2007「現代家庭の特質と家庭教育」『日本教育』No.360(社)日本教育会: 6-9. 査読無

牧野カツコ, 2007「家庭科での保育教育の充実を」『幼児の教育』第106巻第11号, フレーベル館: 4-7. 査読無

牧野カツコ, 2008「家庭科の魅力と威力」『家庭科研究部会誌』第51号, 長崎県高等学校教育研究会家庭部会: 16-41. 査読無

渡邊秀樹, 2007-2008「家族と父親」(3回連載)『月刊福祉』11月号: 78-79, 12月号: 82-83, 1月: 82-83. 査読無

渡邊秀樹, 2007「家庭の教育力を支える社会」『社会教育』12月号: 8-12. 査読無

渡邊秀樹, 2008「家族意識の多様性: 国際比較調査に基づいて」『社会学年誌』49号, 早稲田社会学会: 39-54. 査読無

渡辺秀樹(永井暁子との対談), 2009「対談: 父親像の広がりこれから」『家計経済研究』No.81: 2-15. 査読無

渡辺秀樹, 2008「家族と父親」『世界の児童と母性』65(特集 父親・父性と子ども), 資生堂社会福祉事業財団: 19-22. 査読無

船橋恵子, 2007「男女の働き方と子育て: 6カ国比較調査から」『国立女性教育会館研究ジャーナル』Vol.11: 16-23. 査読無

船橋恵子, 2008「子育ての比較社会学に向かつて: 6カ国比較調査から」『家族研究年報』No.33, 家族問題研究会: 21-32. 査読無

中野洋恵, 2007「父親の子育て参加」『時の法令』1789: 4-5. 査読無

中野洋恵, 2007「家庭教育・子育て支援の充実を」『時の法令』1791: 2-3. 査読無

江藤双恵, 2007「タイの子育てと子ども政策の展開: 都市-農村間の比較」『国立女性

教育会館研究ジャーナル』Vol. 11: 33-45.  
査読無

江藤双恵他, 2008「国際ワークショップ『ローカルニーズの豊かな世界：草の根からジェンダー課題を考える』の成果と課題」『東京家政学院大学紀要』第48号: 59-70. 査読無

大槻奈巳, 2008「親は子どもに本当はなにを期待しているのか：男らしく女らしくの期待から」『国立女性教育会館研究ジャーナル』Vol.12: 83-93. 査読無

酒井計史, 2007「父子の平日接触時間の日韓比較：接触時間の長さの影響と接触時間の規定要因」『国立女性教育会館研究ジャーナル』Vol. 11: 11-22. 査読無

[学会発表](計13件)

Katsuko Makino, 2008 “Recent Family Changes and Child Care in Japan: An overview of six-country comparative research”. Session No.220 IN-SY Japanese Families in Transition: Results of a Six-Country Comparative Research National Council on Family Relations, Little Rock, U.S.A., Nov 6 2008

渡辺秀樹, 2008「現代家族の多様性：国際比較調査から」

日本家族看護学会第15回学術集会(Vol.14 No.2 P.32)、日本家族看護学会、2008年9月13日慶應義塾大学(湘南藤沢キャンパス)

Keiko Funabashi, 2008 “Managing the Balance between Child Rearing and Work: Father’s attitudes in Japan, Sweden and the U.S.A.” Session No.220 IN-SY Japanese Families in Transition: Results of a Six-Country Comparative Research National Council on Family Relations, Little Rock, U.S.A., Nov 6 2008

江藤双恵, 2007「タイの子育て：10年間の変化を考える」日本家族社会学会第17回大会、「国際セッション：日本の子育ては何が問題なのか 『家庭教育に関する国際比較調査』(国立女性教育会館2005)のデータから」2007年9月9日 札幌学院大学

江藤双恵, 2007「タイの子育てと子ども政策の展開」日本タイ学会第9回大会、2007年7月8日 北海道大学

江藤双恵, 2007「高齢化に備えた施策：『家族制度開発』を中心に」(共通論題 高齢化をめぐる：家族政策とのかかわりから)日本タイ学会第10回大会、2008年7月5日 一橋大学

江藤双恵, 2008「趣旨説明」, 「開発から福祉へ? タイ『家族制度開発』の課題」(グループ報告「開発とジェンダー」からみたアジアの社会保障)国際ジェンダー学会2008年大会、2008年9月14日 立教大学(池袋校舎)

江藤双恵, 2008「家族は『制度外社会保障制度』となりうるか：タイの『家族制度開発』を中心に」日本家族社会学会第18回大会、2008年9月6日 大正大学

大槻奈巳, 2007「親は子どもに本当は何を期待しているか」日本家族社会学会第17回大会、「国際セッション：日本の子育ては何が問題なのか 『家庭教育に関する国際比較調査』(国立女性教育会館2005)のデータから」2007年9月9日札幌学院大学

藤本隆史, 2007「親は何を悩んでいるのか」日本家族社会学会第17回大会、「国際セッション：日本の子育ては何が問題なのか 『家庭教育に関する国際比較調査』(国立女性教育会館2005)のデータから」2007年9月9日札幌学院大学

Takashi Fujimoto, Hideki Watanabe, “Changing Family Norms in Six Countries”.

Session No.220 IN-SY Japanese Families in Transition: Results of a Six-Country Comparative Research National Council on Family Relations, Little Rock, U.S.A., Nov 6 2008

酒井計史, 2007「父子の親子時間と父親の子育て(参加と態度):日本と韓国を中心に」日本家族社会学会第17回大会,「国際セッション:日本の子育ては何が問題なのか『家庭教育に関する国際比較調査』(国立女性教育会館2005)のデータから」2007年9月9日札幌学院大学

Kazufumi Sakai, Nami Otsuki and Sae Etoh, 2008 “Factors Affecting Japanese Fathers’ Participation in Child Rearing: Comparison with Korean and US fathers”. Session No.220 IN-SY Japanese Families in Transition: Results of a Six-Country Comparative Research National Council on Family Relations, Little Rock, U.S.A., Nov 6 2008

〔図書〕(計5件)

牧野カツコ, 2008「男性の家事・育児参加の国際比較、経年比較:日本の男性はなぜ家事・育児をしないのか?」柏木恵子・高橋恵子編『日本の男性の心理学』有斐閣:191-195.

渡邊秀樹, 2007「家族意識の変化と少子化」小峰隆夫・連合総合生活開発研究所編『人口減・少子化社会の未来:雇用と生活の質を高める』明石書店:215-241.

船橋恵子, 2008「育児期における家族生活と職業生活のバランス:ジェンダーと育児支援の視点から」船橋恵子・宮本みち子編著『雇用流動化のなかの家族』ミネルヴァ書房:99-119.

酒井計史, 2007「育児期における男性の家

事・育児分担」労働政策研究・研修機構編『仕事と生活:体系的両立支援の構築にむけて』労働政策研究・研修機構:184-201.

牧野カツコ・渡邊秀樹・船橋恵子・中野洋恵編著,2010『国際比較にみる世界の家族と子育て』ミネルヴァ書房.

〔その他〕

(1)その他著作

江藤双恵, 2009「少子化」日本タイ学会・総編集『タイ辞典』めこん.

牧野カツコ・船橋恵子, 2007「産む/産まない各国男女事情:次世代育成に関する国際調査から」(女性のエンパワーメント国際フォーラム・読売、NVEC 女性アカデミア21)『国立女性教育会館研究ジャーナル』Vol.11,パネリスト:牧野カツコ「日本の家庭教育の状況」47-48、コメンテーター:船橋恵子「コメント」57-60.

(2)シンポジウム、研究報告、研修・講演等

船橋恵子, 2007「子育ての比較社会学からのアプローチ」公開シンポジウム『家族の視点から見た少子高齢社会:時間と空間の広がりの中なかで』日本学術会議・家族問題研究会・慶應義塾大学21COE-CCC共催、2007年7月7日慶應義塾大学

酒井計史・中野洋恵・大槻奈巳, “International Comparative Study on Father’s Child Care” 2008年3月14日ソウル市、韓国育児政策開発センター(KICCE)

中野洋恵, 2008家庭教育国際比較調査の報告とデータを使ったワークショップの実施、2008年7月4日 兵庫県両親教育インストラクター養成講座

中野洋恵, 2008社会教育主事講習[A]家庭教育と社会教育 家庭教育の充実・支援 家庭教育国際比較調査の報告とデータを使ったワークショップの実施、2008年8月12日 文部科学省国立教育政策研究所社会教育

## 実践研究センター

酒井計史, 2008『『家庭教育に関する国際比較調査』を読み解く』平成20年度家庭教育・次世代育成地域協働フォーラム in KYOTO ~大切なことってなに?アウトリーチの取り組みに向けて~主催:独立行政法人国立女性教育会館・NPO 法人子どもサポートプロジェクト 2008年2月23日 京都テルサ

酒井計史, 2008 情報提供・ワークショップ「男女共同参画の視点から日本の家庭教育の現状・課題を把握する~『家庭教育に関する国際比較調査』をもとに~」平成20年度家庭教育・次世代育成のための指導者養成セミナー 主催:独立行政法人国立女性教育会館 2008年5月30日 国立女性教育会館

酒井計史, 2008「国際調査から見えてくる日本の子育ての実態」平成20年度「家庭教育・次世代育成地域協働フォーラム in 上越」~ワーク・ライフ・バランス時代の「待つ」から「届ける」子育て支援~主催:独立行政法人国立女性教育会館・NPO 法人マミーズ・ネット 2008年11月15日 リージョンプラザ上越

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

平成19年度 船橋 恵子 (FUNABASHI KEIKO)  
静岡大学・人文学部・教授  
研究者番号: 60229101  
平成20年度 大槻 奈巳 (OTSUKI NAMI)  
聖心女子大学・文学部・准教授  
研究者番号: 30356133

### (2) 研究分担者

平成19年度  
牧野 カツコ (MAKINO KATSUKO)  
お茶の水女子大学・人間文化研究科・名誉教授  
研究者番号: 70008035  
渡邊 秀樹 (WATANABE HIDEKI)  
慶應義塾大学・文学部・教授  
研究者番号: 30114721  
江藤 双恵 (ETOH SAE)  
獨協大学・全学共通カリキュラム・非常勤講師  
研究者番号: 50376828

大槻 奈巳 (OTSUKI NAMI)  
聖心女子大学・文学部・助教授  
研究者番号: 30356133

酒井 計史 (SAKAI KAZUFUMI)  
国立女性教育会館・研究国際室・客員研究員  
研究者番号: 00415358

藤本 隆史 (FUJIMOTO TAKASHI)  
国立女性教育会館・研究国際室・客員研究員  
研究者番号: 80450427

中野 洋恵 (NAKANO HIROE)  
国立女性教育会館・研究国際室・主任研究員  
研究者番号: 60155786

平成20年度  
渡邊 秀樹 (WATANABE HIDEKI)  
慶應義塾大学・文学部・教授  
研究者番号: 30114721

江藤 双恵 (ETOH SAE)  
獨協大学・全学共通カリキュラム・非常勤講師  
研究者番号: 50376828

中野 洋恵 (NAKANO HIROE)  
国立女性教育会館・研究国際室・主任研究員  
研究者番号: 60155786

### (3) 連携研究者

平成20年度  
牧野 カツコ (MAKINO KATSUKO)  
お茶の水女子大学・人間文化研究科・名誉教授  
研究者番号: 70008035

船橋 恵子 (FUNABASHI KEIKO)  
静岡大学・人文学部・教授  
研究者番号: 60229101

酒井 計史 (SAKAI KAZUFUMI)  
国立女性教育会館・研究国際室・客員研究員  
研究者番号: 00415358

藤本 隆史 (FUJIMOTO TAKASHI)  
国立女性教育会館・研究国際室・客員研究員  
研究者番号: 80450427